

第 33 号の刊行にあたって

学園長 島崎 弘幸

「鯉淵学園 教育研究報告」第 33 号をお届けいたします。同号には総説論文 1 報、報文 2 報、事例報告 3 報が掲載されています。教員数の限られた専門学校で、毎年、学術論文誌を発行することの難しさは、どなたにも理解していただけるものと思います。先生方の教育と研究にかける熱意、努力を学園長として誇りに思います。

小島論文「総説：酪農に農業教育を受けた青年を呼び込むために」では、日本の酪農再生の手段として、家族経営酪農から雇用酪農への転換が提唱されている。雇用酪農が成功するには、法人の代表者/農業主の経営能力だけでなく、従業員の質の向上が求められ、日本の酪農教育の在り方から変える必要がある。模範とするべき教育システムはデンマークに見ることができ、就農を条件とする専門教育は、農作業の実習と教室での理論学習からなり、その 2/3 は実習教育に当てられている。学生たちは、動物や自然に囲まれて学ぶことに魅力を感じ、また、実習の過程で徐々に重要な役割を任されることで、チームワークや学習のモチベーションの向上につながっている。著者の豊富な経験から、多くの示唆に富む総説。

高崎ら論文「報文：カボチャ種子糖質関連酵素の活性に及ぼす発芽処理の影響」では、本校の作物園芸農場で収穫された西洋カボチャ種子を用いて、各種グリコシダーゼ（糖質分解酵素）の発芽処理前後での活性変化について検討した。休眠種子の各種グリコシダーゼ活性は、発芽処理により、 β -D-ガラクトシダーゼ活性は約 2 倍に、 β -D-フコシダーゼと β -D-グルコシダーゼ活性は約 20 倍に上昇した。これらの酵素活性画分の粗酵素液を用いたイオン交換クロマトグラフィーでは、いずれも 66 kDa の大きさを持つ酵素タンパク質であることが推定できた。先行研究から、タイロズウッド種子に見られる糖質分解酵素と類似の酵素がカボチャ種子の発芽処理により活性化されることを明らかにした論文。

新井論文「報文：食品栄養科学生（若年層）にお

ける減塩意識の向上に対する栄養士養成教育の効果について」では、成人や高齢者にとって高血圧症の予防には減塩が必要であることから、若い世代の減塩教育と減塩に対する意識の変化について調査した。栄養士養成専門学校において、食塩が多く含まれる食品や料理を食べる頻度、味付けの濃さ、食塩摂取に対する意識、食事の摂取量の観点から、栄養士教育を受ける前の 1 年次の学生と栄養士教育を受けた 2 年次の学生について減塩意識の変化を調査した。食塩摂取の実際と減塩意識に関するアンケート調査では、1 年次の学生と栄養士教育を受けた 2 年次の学生では、後者で食塩摂取量の低下がみられ、減塩を意識する教育効果のあることが分かった。さらに減塩意識の向上と血圧の改善傾向が示されたことから、健康管理の上で若年層に対する減塩指導は有効であることを示した論文。

上記の他に 3 篇の事例報告があり、食品栄養科を中心に活発な研究活動の成果が見られる。当該鯉淵研報 33 号では、食品栄養科からの投稿が多く、アグリビジネス科及び農業技術センターからの投稿についても、さらなる研究の推進と投稿を期待したい。

◆教育・研究活動 50 年の回想

筆者はこの 3 月で、鯉淵学園農業栄養専門学校での教員生活を終える。学園長として、最後の卒業式（式辞）で卒業生に述べたことは、卒業後も勉強を続けて欲しいということ。特に珍しい言葉ではなく恐縮であるが、ここで言う勉強とは、教科書や難しい講義を聴くことではなく、日々の生活の中にある自らの発見や経験を大切にして、その後の活動に役立てて欲しいということ。失敗はしてもよい。人生とは日々、初めての経験をすることであり、失敗を恐れては独創的な活動は何もできない。だからと言って 2 度、3 度と同じ失敗を繰り返してはいけない。それでは進歩することにならない。失敗も、成功も自らの経験として積み重ねて、初めて成長す

る。筆者、自らの経験でもある。

振り返れば、50年前の1973年3月、まだ成田空港のない時代、筆者は羽田空港からアメリカに飛び立った。英語はできない、研究実績もほとんどない状態であったが、ミネソタ大学 (Hormel 研究所) の O.S. Privett 教授の招きで留学をすることができた。その前年、Privett 教授は東京大学 (医学部血清学教室) の招きで来日したが、たまたま筆者が同教授のかばん持ちで、教授の東京 (幾つかの大学) での講演について歩いたことが縁であった。4年間の Hormel 研究所での研究活動で教授の指導下、10報の原著論文を作成したことが筆者のその後の運命を変えた。一つの経験が呼び水となって、次々と経験を重ねながら、鯉淵学園農業栄養専門学校の学園長を経験することになった。幸せな教員及び研究者としての50年であった (Many thanks)。

経歴：ミネソタ大学 (Hormel 研究所・研究員)、帝京大学 (医学部生化学・助教授)、人間総合科学大学 (人間科学部栄養学・教授)、イセ食品株式会社 (イセたまご研究所・所長)、鯉淵学園農業栄養専門学校 (学園長)。またその間の研究活動では、日本油化学会 (理事、会長、名誉会員)、日本脂質栄養学会 (理事、第18回大会長)、日本フリーラジカル学会 (理事)、International Society for Fat Research (国際油脂研究会・会長)、J. Oleo Science (編集長)、非常勤講師；東京理科大学、東京大学大学院 (工学系)、東京大学大学院 (薬学系)、広島大学大学院 (工学系)、知的財産高等裁判所専門職員 (非常勤) などを歴任した。